

アン・ブラッドストリート的女性性の表現
—先駆的思考と男女の理想像—

飯島昭典

アン・ブラッドストリート (Anne Bradstreet, 1612-1672)、すなわち自立した女性、フェミニズム運動の初期的萌芽。こんな言葉がすぐに聞こえてきそうな初期アメリカ社会における女性作家の一人である。彼女をこのような路線で論じている、批評家は数多いが、ベサニー・レイド (Bethany Reid) は「ブラッドストリートは女性が主張できる新しい空間を建設」(“Bradstreet’s construction of a new space in which women can claim”)(540) したとしている。また、ブラックストック・カリー (Blackstock Carrie) は、「ブラッドストリートは自身のアイデンティティを多くの自己表現様式をとおして追求した」(“Bradstreet cultivate her identity through multiple modalities of Self”)(223) 作家と述べて自立した女性としてのイメージを裏書している。実際、彼女をもってアメリカ女性作家の誕生と捉える文学史が圧倒的に多いのではないだろうか。確かに彼女の創作活動は女性としての近代的自我を感じさせる記述も少なくない。そして彼女の姿勢は、後に続くエミリー・ディキンソン (Emily Dickinson) 等の女性詩人の潮流の発端をなしていると考えすることは、それほど間違ったことではなく、むしろ真理の一つであると言えそうである。

ブラッドストリートは『10番目の詩神』¹ (The Tenth Muse, 1650) の序詞の第7連で次のように述べている。

Men can do beft, and women know it well
Preheminence in all and each is yours;
Yet grant fome fmall acknowledgement of ours. (102)

男は最善である。女もそれをよく知っている。

卓越さは、何から何まで男のものである。

でも少しだけでも私たちを認めてください。

このように彼女の女性としての立場を明確にして、女が男に「戦争を行うのは、不正であり無駄にすぎない」(“ It is but vain unjustly to wage warre ”)(102)と男性への譲歩を認めている一方、男性が「劣った性別が作る卓越さに嫉妬する」(“ envy the excellency of the inferior Sex ”)(83)作品として自身の書を実際に評しているのである。この態度が彼女を近代的な自我を持つ女性の誕生と捉える根拠になっており、彼女が女性の自立を唱えた第一の女性であるとする由縁である。

もちろん、このことに私は否定するつもりはない。彼女は近代的自我の立場で創作した女性であり、後のアメリカが彼女を評価したのもこれが原因の一つであろう。しかし、私がここで考えてみたいのは彼女の女性としての立場、彼女の女性としての創作態度の再考である。単なる女性の自立、女性の自我を訴えたのがブラッドストリートの意図したことではない、という事を説明するのがこのペーパーの目的である。彼女が目指した女性性の表現はいったい何を意味するのであろうか。

ブラッドストリートが生きた時代というのは、ピューリタニズムという信仰心が非常に大きな意味を持つ。プリマスにピルグリムファーザーズが到着し、新天地アメリカにおいて理想国家を築こうと厳しい環境の中、日々を信仰とともに費やし、行動規範がピューリタニズムという神観に形作られた社会であった。彼女も神への詩を多く作り、神の恩恵、救いを声高に謳いあげている。ブラッドストリートはピューリタニズムの思想を除外しては考えられない作家である。ピューリタニズムの重要な教義の一つに予型論というものがあるが、ブラッドストリートも予型論の影響を色濃く受けている事は想像に難くない。ウィリアム・アーヴィン(William Irvin)はブラッドストリートの創作態度を旧約聖書の記述に関連づけて、きわめて興味深い論を展開している。彼はブラ

ッドストリートの著作を聖書のアレゴリーであるとしており、神的なインスピレーションが客観性を与えているとしている(75)。また、ロバート・リチャードソン(Robert Richardson)は「彼女はピューリタニズムの感受性と呼ばれるものから書いている」(“ She wrote from what might be called the Puritan sensibility ”)(101)として、ピューリタニズムの影響を述べている。またエリザベス・ホワイト(Elizabeth White)はブラッドストリートの伝記的情報を示し、彼女の信仰心の裏づけを行っている(56)。このようにブラッドストリートの著作はピューリタニズムの影響があることが証明されているが、ここではこの中の予型論に注目し旧約聖書の中の創世記の男女の誕生の物語をブラッドストリートの作品に関連づけて論を展開してみる事とする。

創世記第2章21節には、次のような記述がある。

主なる神はここで、人を深い眠りに落とされた。人が眠りこむと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。(3)²

あばら骨から造られた女性は男性より下位の存在であり、男性の補助的な存在である、というのが長い歴史上のこの部分の解釈であり、男性の優越性を主張する上で、この創世記の記述はしばしば引用されてきた。しかし、この創世記の記述は本当に女性が男性の補助的役割に甘んじる事を示唆しているのだろうか。男性の下位に位置づけられる存在としての女性をあらわしているのだろうか。

そうではない。男性と女性の対等的関係、協力関係をあらわしているのである。創世記第2章18節で、このような記述を我々は見つけることができる。

「人が一人にいるのはよくない。彼に合う助ける者を造ろう」(3)。聖書によ

ると、神は自分が創造した生き物の中から彼に合う助けるものは、見つけられなかったのである。そこで男のあばら骨から女を造ったのである。「彼に合う助ける者」とは、彼と向き合いそして関わりを持つ存在としての女であり、つまり単なる補助的役割を演じる存在ではなく、人が人であるために不可欠であり、対等なパートナーとして男と女を表している、と考えられるのである。男の一部から生まれた女は男の傍に連れてこられ、男は「ついに、これこそ私の骨の骨。私の肉の肉」(3)と声を上げるのである。この「ついに、これこそ私の骨の骨。私の肉の肉」という発言は、女の誕生をもって初めて男性が自分の存在を意識し認めた瞬間を表しているのである。女の存在があって初めて男の存在を意識する事ができたのである。女が誕生しなかったら、男は自分を意識できないのである。このように考えると、この創世記第2章の女の誕生の部分は、男と女の協力関係、互いの対等性をあらわしているとするのが妥当ではないだろうか。同じ第2章で「男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」(3)、とある。まさに二人あつての人間であり、男と女両方の存在をもって一つの存在、すなわち「一体」である人間なのである。どちらか片方が欠けていては「一体」とは言えず不完全な人間なのである。

またエデンの園において蛇の誘惑により善悪を知る木の実を食べたアダムとエバであるが、この第3章も男性の優越性を示す根拠としてしばしば言及される箇所である。アダムをそそのかして木の実を食べさせたのがエバであり、それゆえ女が誘惑させる存在であり、男を惑わすものと捉えがちである。しかし、注意深い読みにより、この事は全くの曲解であるという事がわかる。禁じられた木の実を食べたアダムは、「生涯食べ物を得ようと苦しむ」(5)罰を神によって与えられ、エバは「苦しんで子を産む」という罰をうける。神は誘惑に負けた男と女に対してそれぞれ違った罰を対等に与えているのである。蛇にだまされたエバもそそのかされたアダムも同様に、神はエデンの園を追放しどちら

に対しても罰を与えているのである。二人がそろって一体となる人間という考えを如実にあらわしている神の行為ではないだろうか。

ここで考えられる反論にたいして一言付すことにしよう。エバは神により「お前は男を求め彼はお前を支配する」(4)と言われ、それゆえ支配する存在としての男が明確に示されているのではないか、という反論である。これは読みが浅いという謗りを免れない。この「支配する」とは「求め」に対しての「支配」であり、つまり反応や交流としての意味である。「支配する」とは感情面の事を言っているのであり、女の感情を満たすものとしての「支配」なのである。

「求め」に対しての感情面での反応であり、求めるという不足の状態に対して満たすという精神的合一を意味しているのである。つまり、「お前は男を求め彼はお前を支配する」という16節の記述は、男性の人間としての優位性を表すものではなく、男女の協力や対等性を表す表現なのである。アダムとエバ、男と女はそれぞれ共に罪を犯し、共に神の怒りを買ひ、共に罰を受けるのである。対等な存在としての男と女がわかる失樂園の物語である。

女は男の一部分から生まれ、男はその事によって自己を認識する。男女の協力、精神的対等性が創世記第2章で示されている。そして失樂園の物語である第3章の蛇の誘惑の物語も同じ人間としての男女の弱さを表し、神による罰が等しいことを示している。つまり第3章においても、男女の対等性、そして上に示した感情面での互いの協力関係を我々は見えてとる事が出来るのである。この創世記の原初の物語の意味を明らかにしたところで、この男女の関係がブラッドストリートの詩の中でどのように描かれているのかを考察する事とする。前に述べたとおり、予型論とはピューリタニズムの教義の中で重要な概念である。ブラッドストリートという初期アメリカ社会に生きた人間が、この予型論の根拠となる旧約聖書の記述に深く影響を受けているのは当然の事と考えられるのである。

ブラッドストリートが生きた時代のニューイングランドはジョセフ・マッカーラス (Joseph McElrath) が認めているように「身体的な病気と物の深刻な不足に苦しんだ」(“ suffering from physical ailments and severe shortages of supplies ”) (16) 時代である。このような生活の中に生きたブラッドストリート自身も何度も病に苦しみその度に忘れていた神の恩恵を思い出し、救いを求めたようである。彼女の伝記的事実が著作からしか得られない現在、この彼女の苦しみから忘れていた恩恵、救いという構図はいろいろな彼女の詩において我々は見つけることが出来る。彼女は忘れていた神を思い出し「再び神へと戻っていく」(“ turn back to God once again ”) (McElrath, 16) のである。こうした中でブラッドストリートが自ら精神性を深めつらい境遇である物質世界よりも、自己の内面世界を充実させていったのである。

「肉体と魂」(“ The Flesh and the Spirit ”) の中で姉妹である肉体と魂は互いに自分の考えを述べ合う。肉体は魂に問いただす。「瞑想しても / この世は無頓着に進むんじゃないの」(“ Doth contemplation feed thee fo / Regardlefly to let earth goe? ”) (382)。「月を越えて夢見るだけで / すぐそこで住めるようになるの」(“ Doft dream of things beyond the Moon / And doft thou hope to dwell there foon? ”) (382)。「現世の富」(“ worldly wealth ”) (381) を信じる肉体に対して魂は次のように反論している。

My garments are not filk nor gold,
Nor fuch like trafh which Earth doth hold,
But Royal Robes I fhall have on,
More glorious then the fliftring Sun; (384)

私の服はシルクでも金でもない、
この世におけるそんなごみではない、
でも私は神のドレスを着るわ、
光り輝く太陽よりも輝くそれを。

現世にある「現実」(“ Reality ”)(382)よりも、精神的なものを信じる魂は、神の存在を信じ、「この世に並ぶものはない」(“ none on Earth can parallel ”)(382)場所の住人になることを期待しているのである。さらに彼女は「隠れたマナを私は食べる」(“ The hidden Manna I doe eat ”)(384)と述べ、まさに現世では見えない神の恩恵を信じているのである。神の国では「太陽も月も必要ない」(“ Nor Sun, nor Moon, they have no need ”)(385)。なぜなら「神からの栄光が事を進める」(“ glory doth from God proceed ”)(385)からである。上に示した引用の、この世にあるごみという上辺の美しさであるシルクや金の美しさは、ブラッドストリートにとってまさに偽りの美しさなのである。彼女が信頼したのは、形而上の概念である神がもたらす美しいものである。魂に精神世界の重要性を語らせることにより、ブラッドストリートは自らの精神性の重視を表明したと言えるのである。物質世界の美の代表として「ダイヤモンド、パール、金」(“ Diamonds, Pearls, gold ”)(384)という語を魂は引き合いに出すが、彼女の「王冠」(“ Crown ”)(384)は、そういったもので出来ているのではないのである。この crown という語はおそらく栄誉の意味で使っている比喻だと考えられるが、まさに魂、すなわちブラッドストリートの栄誉とは、物質世界を超えた精神世界の美しさという栄誉を望んでいるのである。この精神世界の重視、強調という態度は彼女のほかの詩作の中にも見て取ることが出来る。

「病気の発作のときに」(“ Upon a Fit of sickness ”)の箇所を引用

してみよう。ブラッドストリートは病を患い死を意識する。「すべての人間は死ぬことになっており、私も / それには抵抗できない」(“ All men muft dye, and fo muft I / This cannot be revok'd ”)(391)と自らの人生にまで疑問を持ち始める。彼女にとって死とはまさに終末であり、終焉、不毛性を意味するのであろうか。そしてこの死に向かって進んでいく人生とは、彼女にとって心配事と不和だけのものであり、無益なものなのであろうか。彼女はこの詩の終末部分で次のように述べている。

O great's the gain, though got with pain,
comes by profeffion pure.

The race is run, the field is won,
the victory's mine I fee, (392)

ああ、大きいのだ、たとえ苦しみがあっても、
純粹な信仰告白により、もたらせられるものは。

流れは進み、野は勝ち取られる。

私は自分の勝利を見る。

病気に直面している彼女は、人生に対しての希望を失っている女のように思える。しかし、この人生という苦しみに対して彼女は信仰という力によって勝利を見出すのである。たとえ、勝利するまでの過程は苦しいものであっても、最終的に得るものは苦しみではなく、その反対の勝利であり、この勝利という語から連想させるものは、苦しみの反対の喜びなのではないだろうか。この「流れ」(“ race ”)には、人生のときの流れという意味が含まれており、「野」とは無限や豊饒をあらわす伝統的な語である。³つまり、人生が進んでいき、たどり着くのは無限の豊饒性、天国という喜びを表しているのである。現世の営

みは苦しいものであっても、それは無限という時間の中での一時のものであり、現世の後に続く来世は豊饒性を勝ち取ることによる喜びなのである。

「沈思」(“contemplation”)の中の第29連で現世の中に生きる人間を「せいぜい脆くて空ろな生き物」(“at the best a creature frail and vain”)(379)と述べ、「昼も夜も、内側も外側も、苛立ちや / 敵から、友から、愛すべき人からの悩み、近しい / 親族からの悩み」(“But day or night, within, without, vexation, / Troubles from foes, from friends, from deareft, near’ft / Relation”)(379)によって「悲しみ、失い、気を落とし、苦しみになすがままにされる」(“Subject to forrows, loffs, ficknefs, pain”)(379)存在として定義している。このように現世に対しての幻滅を示すブラッドストリートであるが、リチャードソン(Richardson)が「この詩において現世と現世の生活が単純に払いのけられており、ばら色の天国の希望が代わりのもので提示されている」(“in the poem, earth and earthy life were simply shrugged off and rosy hopes of heaven held out as an alternative”)(113)と述べているように、やはりこの詩においても来世における希望を我々は見出すことができるのである。ブラッドストリートは最終第33連、最後の4行で次のように語る。

Their parts, their ports, their pomp’s all laid in th’duft
Nor wit nor gold, nor buildings feape times ruft;
But he whose name is grav’d in the white ftone
Shall laft and fhine when all of thefe are gone. (381)

彼らの体、頼りにする物、華やかさは、すべて塵に帰す
知力も金も、建物も錆でだめになることは避けられない

しかし、名前が白い石の墓に刻まれ、

こういったものがすべて消え去った時、彼は生き続け、輝き続けるのだ。

現世にある様々な物質が消えてからこそ、人間は生き続けそして輝きという喜びを得ることができる、というブラッドストリートの来世への希望を見て取ることができる。そしてこの詩における白い石のメタファーは、タブララサ、白紙状態のメタファーであり、墓に刻まれた彼の名前、つまり死んだ後の人生が白紙状態であり死んだ後の生活が白紙状態に刻まれるという意味なのである。死んだ後の人生がスタートであり、タブララサの中に刻まれていく真の意味での人生が暗示されているのである。死をもってスタートとする、死により人生の真実が刻まれていくというメタファーなのである。リチャードソンの言う「天国の希望」という精神性の重視は、この詩においても我々ははっきりと見出すことが出来るのである。

以上説明したように、ブラッドストリートは非常に形而上の概念や精神性を重視する詩人である事がはっきりしたのではないだろうか。このように考えてみると、アブラム・エンゲン (Abram Engen) がブラッドストリートは女性性の主張に関して「公と私の間が存在する考えうる境界に常に異を唱え、しばしばその境界を曖昧にした」(“constantly challenged and often blurred the imagined boundary between public and private”)(50)女性であるという自身の女性性を述べる際に、女性の自立と尊厳だけを宣言した詩人である、と結論付けるのは少し無理な気がしてならない。ブラッドストリートは、前に述べた旧約聖書の影響を受けているのであり、そしてこの旧約聖書の男女についての記述は互いの精神的協力関係を示す物語なのである。そして彼女は、精神性に深い信念と希望を見出した詩人なのである。彼女の作品の中に現れている女性の自立を表していると考えられてきた記述を再考してみる必

要があるようである。

女性性の目覚め、独立の表現として度々引用されるブラッドストリートの『10番目の詩神』の序詞であるが、ここでは特にこの序詞の最後の連を取り上げて、彼女の女性性への態度を再考してみたいと思う。彼女は第8連で次のように語る。

And oh ye high flown quills that foar the skies,
And ever with your prey ftill catch your praife,
If e're you daigne thefe lowly lines your eyes
Give Thyme or Parfley wreath, I ask no bayes,
This mean and unrefined ure of mine
Will make you gliftring gold, but more to fhine. (102)

そしてあなたは空に高く舞い上がる羽

あなたへの賛美はあなたが獲物を取ること

もしあなたが、この平凡な詩行に目を留めてくれたなら

私は栄誉はいらない。タイムやパセリの花輪をください

私のこの平凡な荒削りの集合作に

そうしたら、あなたを金色に輝かせ、もっと光らせるでしょう。

前にも述べたようにブラッドストリートは深い精神性に重きを置く詩人である。自分の存在をタイムやパセリなどの平凡なものとして表現している一方、彼女の存在は男性をさらに輝かせ、際立たせるものとして意識しているのである。この彼女の態度には、創世記に見られる男女の協力関係、互いの対等性を見出すことが出来るのである。たとえ自分がパセリなどの目立たないものであっても、それは男性を輝かせるのに必要な要素なのである。男性にとっても

ブラッドストリートのいうタイムやパセリがなければ、彼は輝ける存在ではないのである。ブラッドストリートがここで言う、自分の存在の謙虚さとは決して卑屈な態度からきたものではない。「榮譽」を望まないブラッドストリートは、他者を輝かせるものとしての自らの存在、有名無実の「榮譽」ではなく、他者つまりこの場合、男性を指すが、他者への実質的精神的パートナーとしての自己の表現であると考え事が出来るのである。この彼女の精神的パートナーとしての女性性は彼女の描く様々な他の詩にも表されているところである。彼女は家族観を大切に作る詩人である。ブラッドストリートは自分の著作に含まれる題材として「自分の家族の様々な事柄の取り扱い」(“managing of her Family occasions”) (84) とはっきり明言している。この「家族」という単語に対して彼女が大文字を使っていることから、精神的調和の象徴である家族観の重視、強調が表されているのである。この家族の重視はアラン・ロブ(Allen Robb)も次のように自身の著作の中で証明している。「彼女は知人の証言によれば、忠実な主婦であり、献身的な娘であり、褒めるに足る友人であり、勤勉な母、そして貞節で愛情に満ちた妻であった」(“She was a woman who, according to the testimony of those who knew her, was a dutiful homemaker, devoted daughter, commendable friend, diligent mother, and a faithful, loving wife”) (18)。序詞の第8連で示す、男女の協力関係の延長線上にブラッドストリートの重視する家族観が現れているのは、言うまでもないことである。精神的パートナーとしての互いの存在がなければ、家族という概念は出てこないのである。精神的協力関係の延長線としての家族の重視は、彼女の描く自らの子供像にもはっきりとした特徴をなす。

「人間の4つの時代」(“Of the four Ages of Man”)の詩の中でブラッドストリートは以下のように子供について語っている。

Childhood was cloth'd in white & green to fhow
His fpling was intermixed with fome fnow:
Upon his head nature a Garland fet
Of Primorofe, Daizy & the Viloet. (147)

子供時代は見られるために白と緑の服を着ている
彼の春は雪と結びついている
彼の頭の上に、自然は
桜草とデイジーとすみれの花輪を乗せる。

緑色はいわゆる新緑のイメージであり、若葉を連想させる。⁴これから育っていく若葉の将来性や若さを表現していると考えられるのである。上に挙げた引用箇所は様々な色のイメージが代表的である。例えば、桜草のピンクやデイジーの黄色、すみれの紫、そして雪の白である。これらの華麗なカラーシンボリズムは子供時代への賛美であり、影のない幸せな日々への描写である。ブラッドストリートが8人の子供を立派に育てあげ、先ほど述べたよき母という事実からもわかるように、子供に対しての愛情や好意が感じられる詩なのである。様々なカラーシンボリズムの中で、白い服、雪の白色が二度強調されていることは、注目に値する。この白が象徴するのは当然、純粹無垢、穢れなき存在としての子供であり、子供に対しての絶対的な敬愛の印として、ブラッドストリートが使っている語である。この穢れなき存在である子供に対して「自然」は栄誉として「花輪」を頭の上に乗せるのである。ブラッドストリートによる子供への評価が、この詩において「自然」という語を使わせているのであろう。natureには自然という意味のほかにも、物の本質という意味もあり、子供に対しての栄誉を示す nature は本質的、根本的特性であり、そうあってしかる

べきである、という意味にも考えられるのである。このようにブラッドストリートは家族感情の一形態である子供に対して大変な愛情と敬愛を示しているのである。子供というのは当然の事ながら、夫という存在がなければあり得ないものであり、子供への賛美は当然の事ながら、ブラッドストリートの夫についての賛美、敬愛という思考につながっていくのである。

私の大切な愛すべき夫に寄せて」(“To my Dear and loving Husband ”)のタイトルの示す通り、この詩は夫への愛があふれる詩である。夫と妻という男女の協力関係の結果としての子供の賛美は上に示したが、この詩においてはまさに夫という男性に対しての妻である自分の女性性が如実に表現されているのである。この詩の分析を今まで説明してきたことを考慮に入れて行ったら、このペーパーの論題であるブラッドストリートの表現する女性性とはいったいどんなものであろうか、という問いへの答えは自ずと明らかになってくるはずである。議論のために必要と思われるので、わずか12行であるこの詩の全文を引用してみたいと思う。

If ever two were one, then furely we.
If ever man were lov'd by wife, the thee;
If ever wife was happy in a man,
Compare with me ye women if you can.
I prize thy love more than whole Mines of gold,
Or all the riches that the Eaft doth hold.
My love is fuch that Rivers cannot quench,
Nor ought but love from thee, give recompence.
Thy love is fuch I can no way repay.
The heavens reward thee manifold I pay.

The while we live, in love lets fo perfever,
That when we live no more, we may live ever. (394)

もし二人が一つなら、確かに私たち。
妻に愛される男がいるなら、それはあなた。
もし妻が男の中に幸せを見出したなら、
あなたたち女性よ、できるものなら私と比べてごらん下さい。
私はあなたの愛に対して金鉱山の全てより価値をおく。
あるいは東の持つ全ての富よりも価値をおく。
私の愛は川が静めてしまうものではなく、
まさにあなたの愛が、償いへとになってしまうものでもない。
あなたの愛はどうしても返せないもの。
私が祈った何倍もの褒美を天が与えるもの。
私たちが生きている間、愛が屈せずにやりとおさせましょう。
私たちがもはや生きられないとき、私たちは永遠を生きるのだから。

夫への愛の不滅性、愛の強さを熱烈に詠んだブラッドストリートの詩である。彼女がここで「二人は一つになる」というフレーズを使っているのは、注目し値する。幸せとは一心同体のもとに感じられるものであり、どちらが欠けてもそれは実現できないものである、という彼女のメッセージを読み取ることができるのである。彼女が言う「私たち」という言葉の連発もそれを強調させる語なのである。これまでの議論からブラッドストリートは、強く精神世界に重きを置いた詩人であり、男女の協力関係、互いが互いを引き立てあう存在としての男女の在り方を示す詩人である事が明らかになったが、この詩においても彼女は、夫との精神的一体感、深い精神的つながりを明らかにしているのである。彼女は死んだ後の世界においても夫との愛が生き続ける事を信じ、そしてこの

世においての愛をも同時に信じているのである。彼女にとって夫とは、精神的な一体感を可能にする存在であり、そして同時に「私たち」の言葉の連発が明らかにするように夫にとっても彼女は精神的な一体感を可能にする存在なのである。以上のように説明してきた彼女の男女の協力関係、精神的な一体感はこの詩において極みへと達するのである。ブラッドストリートが子供に示した賛美というのは、子供が表す未来という概念への賛美とも考えることができる。男女の協力関係の延長である子供への賛美というのは、愛の賛美であると同時に愛の未来的思考、愛の将来性への賛美でもあるわけである。そして、この夫に対しての愛の表現も不滅の愛という未来的思考を含む感情なのである。

ここでそろそろこのペーパーの論題である、彼女の目指した女性性の表現とは一体何であるか、という問いに答えを出してみたいと思う。ブラッドストリートは旧約聖書に影響を強く受けており、⁵創世記の男女の物語は男女の対等性、協力関係が表現されている事を示した。そして彼女の精神世界への重視は大変なものであり、その態度が彼女の描く詩の中の女性性の表現に現れている、つまり男女の精神的な一体感を表現していることを証明した。この精神的な一体感とは、男女の協力関係の延長である子供への賛美として表され、未来的な願望を含むものである事も説明した。愛すべき夫に対しても互いの精神性を充実させる存在としての男女のあり方をブラッドストリートは示した。これらの説明で明らかになったはずである。ブラッドストリートの目指した女性性の表現とは、女性の自立、自我の目覚めを目的にしたのではないのである。彼女の目指したのは、女性性を表現することによる男女の協力関係の確立、精神的な協調関係の確立なのである。女性性の表現とはブラッドストリートにとって、それは男女の支えあい、男女の対等な精神的な合一感を可能にするものなのである。これがブラッドストリートの目指した女性性の表現なのである。

21世紀に生きる我々が男女の対等性、平等を考える際に極論的に男女の肉

体的特長をも無視したフェミニズム論者さえ存在する。⁶ブラッドストリートが示したのは、男女の精神的な協調、精神的対等性である。350年前アメリカで示した彼女の先駆的思考は、現在の混沌とした世の中で真の男女の存在の意義を考える意味で、ますます重要性を増してくるのではないだろうか。アン・ブラッドストリートは男女の真のあるべき姿を時代に先駆けて表現した偉大な詩人なのである。

注

1. 本論文中『10番目の詩神』への言及は *Works of Anne Bradstreet*, ed. John Ellis 所収の同作品による。引用については原点テキスト尊重の立場から、現代語に直さず印字してあるままの旧字体のままとする。
2. 論文中での聖書への引用は、日本聖書協会発行の新共同訳『聖書』を使用する事とする。聖書に関しては様々な出版社からの発行があるが、日本聖書協会発行の、この版はスタンダードでありオーソリティを持つものとしての評価が高い。よって同書を使用する事とする。尚、米文学に関する論文である為、英語による聖書からの引用も妥当かと思われるが、聖書という人類共通の書物を使用するにあたり、わざわざ英語版を使用する必要もない、というのも同書を使用する理由の一つである。
3. 野の無限性、豊饒性とは当然のことながら、大地のイメージと結びつく。大地のもたらす実り、あるいは旧約聖書の土地に関する神の恵みとしての永続性の記述など、無限性、豊饒性を表す作品は枚挙にいとまがない。一例を挙げれば、旧約聖書中の「出エジプト記」、「ヨシュア記」の記述は神からの恵みである土地としての永続性や豊饒性を表す内容があふれている。大修館『イメージ・シンボル事典』にも似た内容の説明がある。
4. この着想は日本の俳句「万緑の中や吾子の齒生えそむる」から取ったものである。緑色という若葉と赤ん坊という新しさの象徴である二つが結びつき、緑色という色が新緑である若葉と重なるのである。ブラッドストリートの感性が日本の俳句にも見られるのは、興味深い事である。し

かし、当然のことながら上に挙げた俳句とこのブラッドストリートによるこの箇所は互いに影響を認めるものではなく、執筆者である私のイメージから論旨を展開するものである、という事を付す事にする。

5. これは明白な事である。当時のつらい境遇が神の出現を約束するための契約の書である旧約聖書の時代と重なり、来るべきよい時代がキリストという救世主の表れと思想を表した新約聖書と重なる、という考えは思想史的観点から言っても明白な事である。今現在が辛くとも、来るべき恩恵あふれる時代が必ずくる、という思想は同時代の作家の作品中にも数多く見られる現象である。論文中でも述べたが予型論はこの時代を表す極めて重要な宗教上の概念である。
6. フェミニズム問題は言及する際に、非常に注意を要する問題の一つである。論文中でこのように述べるのも、何らかの反論批判は避けられない事であるかもしれない。「男らしさ」「女らしさ」という言葉そのものも、批判の対象になっている今日の傾向であるが、私がここで述べたのは、いわゆる一般論を考えての発言である。肉体的特長をも無視した男女同権の主張は、私自身は不適切であるという信念を持つ。学問の為の学問、フェミニズム論のためのフェミニズム論という傾向が最近のフェミニズム研究の中に見られないだろうか。男女は平等である、という考えを私は強く信じ、揺ぎ無い事実でもある。しかし、明らかに極論的ではないか、という研究には私は疑いの目を持たずにはいられない。

引用·参考文献

- Bradstreet, Anne. *Works of Anne Bradstreet*. Ed. John Harvard Ellis. Gloucester: Peter Smith, 1962.
- Carrie, Blackstock. “ Anne Bradstreet and performativity: Self-cultivation, self-deployment. ” *Early American Literature* 32, 1997. 222-248.
- Craig, Raymond A. *A Concordance to the Complete Works of Anne Bradstreet*. New York: Edwin Mellen Press, 2000.
- Engen, Abram. “ Advertising the Domestic: Anne Bradstreet’s sentimental poetics ” *Legacy* 28, 2011. 47-68.
- Gordon, Charlotte. *Mistress Bradstreet: the untold life of America’s first poet*. New York: Little Brown, 2005.
- Irvin, William J. “ Allegory and Typology, “ Imbrace and Greet ” : Anne Bradstreet’s “ Contemplations ” .” *Critical Essays on Anne Bradstreet*. Ed. Pattie Cowell and Ann Stanford. Boston: G. K. Hall, 1983. 174-180.
- McElrath, Joseph R. *The Complete Works of Anne Bradstreet*. Ed. Joseph R. McElrath and Allen P. Robb. Boston: Twayne Publishers, 1981.
- Merrim, Stephanie. *Early modern women writer’s writing and sor Juana Ines de la Cruz*. Nashville: Vanderbilt

- University Press, 1999.
- Mertin, Wendy. *An American Triptych: Anne Bradstreet, Emily Dickinson, Adrienne Rich*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1984.
- Piercy, Josephine. *Anne Bradstreet*. New York: Twayne Publishers, 1965.
- Reid, Bethany. "Unfit for light: Anne Bradstreet's monstrous birth." *The New England Quarterly* 71,4 1998. 517-542.
- Richardson, Robert D. "The Puritan Poetry of Anne Bradstreet." *Critical Essays on Anne Bradstreet*. Ed. Pattie Cowell and Ann Stanford. Boston: G. K. Hall, 1983. 101-115.
- Rogers, Katharine M. *The Meridian Anthology of Early American Women Writers: from Anne Bradstreet to Louisa May Alcott, 1650-1865*. Ed. Katharine M. Rogers. New York: Meridian, 1991.
- Rosenmeier, Rosamond. *Anne Bradstreet revisited*. Boston: Twayne Publishers, 1991.
- Saltman, Helen. "Contemplation": Anne Bradstreet's Spiritual Autobiography." *Critical Essays on Anne Bradstreet*. Ed. Pattie Cowell and Ann Stanford. Boston: G. K. Hall, 1983. 226-237.
- Walker, Cheryl. "Anne Bradstreet: A woman Poet." *Critical Essays on Anne Bradstreet*. Ed. Pattie Cowell and

Ann Stanford. Boston: G. K. Hall, 1983. 254-261.
White, Elizabeth Wade. “ The Tenth Muse - A Tercenterary
Appraisal of Anne Bradstreet .” *Critical Essays on
Anne Bradstreet*. Ed. Pattie Cowell and Ann
Stanford. Boston: G. K. Hall, 1983. 56-75.

『聖書』共同訳聖書実行委員会編、東京、日本聖書協会、1987年。

アト・ド・フリース『イメージシンボル事典』山下主一郎編、東京、大修館書
店、1984年。

吉津成久『アメリカ詩の原点：Anne Bradstreet の人生の詩』東京、学書房、
1977年。